

言語と記号（一）

— 言語論の系譜 —

中 島 聰・栗 栖 照 雄*

岡山理科大学工学部

*岡山理科大学非常勤講師

(1994年9月30日 受理)

序

「われら一個の記号なり，解す術なき——」—ヘルダーリン—

「言語と記号」がその相互連関において主題的に、すなわち学的に究明されるのは、西洋・ヨーロッパの思考の伝統に特有な出来事である。このことを先ず明確に認識しておく必要がある。そしてもう一つ認識しておくべきことは、「言語と記号」の問題に論究の眼差が向けられる際、それぞれの立場において基本的に相異なった三種類の前提が置かれる、ということである。そのうちの二つは、「言語」と「記号」の相互の包含関係に関する前提、すなわち、一方は「言語」を「記号」現象のうちの特殊なものとする前提であり、他方は「記号」を「言語」現象のうちの特殊なものとする前提である。そして三つ目の前提とは、「言語」と「記号」を異なった現象領域において取り扱うという前提である。しかしこの第三番目の前提も、「言語」と「記号」がまったく無縁な現象であることを前提にしているわけではない。そこにはなんらかの共通現象が認知せられるにせよ、一端その共通現象の主題的な解明は棚上げして、「言語」と「記号」のそれぞれの固有な現象を別個に取り扱おうというものである。最初の二つの前提にしても、「言語」と「記号」の両現象領域を完全に同一な現象の別名にすぎないとする立場もあれば、明確な包含・従属関係（一般的・特殊の或いは上層・下層関係）として表明する立場もあり、さらには両現象を一つの領域の中に局在化させ、その・差異・臨界を段階的変位において認知するか、ないしは、差異・臨界を故意に曖昧にしてその両現象の「にじみ（或いは揺らぎ）」を積極的現象として評価しようとするものもある¹⁾。

こういった立場による前提の多様化は、中世における宗教的・神学的領域に限定された「文献学」や「解釈学 (Hermeneutik)」といった「言語論」が、西欧啓蒙理性の自己展開にともなって、「歴史的意識」として自覚された「近代的自我」が、より一般的な「文献学」や「美学」の形成、「普遍学 (自然・実践・論理の総体的知の基礎づけ)」の構想とそれに伴う「科学的認識」と「科学的世界像」の基礎づけ、さらには「近代国家」の社会システムと近代法の根拠づけ、といった諸課題をこなしてゆく過程の中で自ずから生じたもので

ある。そこには、こういった課題の解決を運動させる或る種の共通した地盤、西欧の「言語論」が運動する一つの「場所」が垣間みえる。

そこで先ずは、西洋における「言語と記号」に関する思想の歴史的展開を概観することにする。この概観は、この思想の「場所」と展開の「道」を指示することになる。その「場所」で、西洋の「言語と記号」に関する思考が生まれ、成熟してきたのである。この「場所」は、現代の「言語論」——「言語学 (linguistics)」だけでなく、「数学」, 「論理学」も含めて最広義のエピステーメ・ロギケー (epistêmê logikê) [論理学 Logik はこの省略形]: ロゴス (言語) についての真知=体系的知=科学——の全体がそこに根を下ろしている地盤である。そして、この「場所」の所在を究明する (Erörterung) ことは、西洋・ヨーロッパ特有の体系的知=「近代科学 (science)」全体の構造と表記の本質を問題にすることになるであろう。西洋における「言語論」の展開は、「近代科学」の成立の事情とその性格の形成に密接に関連している。「科学」的知の本質は、「言語論」の領域において「言語」が「記号」として把握されることを内的に要求する。そして逆にこの要求が「科学」の構造を規定し返すことにもなる。こうした相互規定の具体的様相は、本論において後に詳細に検討される予定であるが、差当り言えるのは、科学的知全般における「普遍化」・「概念化」・「体系化」・「形式化」といった諸傾向は、その知を表記するために必然的に「言語」の「記号化」を招来する、ということである。したがって西洋においては、「言語論 (言語についての反省的知)」は必然的に「科学論 (科学についての、すなわち、知についての反省的知)」となる。そのいずれも一つの「場所」から発生している。次に述べる「言語論」の歴史的展開の「道筋」は、この一つの「場所」を探索し、そこへ導いてくれるためのものである。したがって論述は、差当り西欧「言語論」のトポロジーにすぎない。

I

「原初、ミュトス (mythos) とロゴス (logos) は同じものであった²⁾ということから話を始めねばならない。現代言語学は、いわゆる「アダムの言葉 (lingua Adamica)³⁾ (あらゆる言語に共通する祖語=本来的な意味でのミュトス) を解明するという「無駄な」努力は放棄している。すべての「言語論」は、既に予めその力を及ぼしている言語の地平の中で展開される。言語についての思考は、不可避免的に言語のこの予め支配する力に頼って運動するのである。したがって、いかなる言語論といえども、己れが拠って立つところの地盤であるこの「予め支配する言語」の、更にその地盤を掘り起こすことは、事の本質として不可能である。この事実は、きわめて明白なものでありながら、あまりに自明なことだけに却って失念しやすい。これはまた、人間の言語に対する存在と知の様式に決定的な影響を与えることになる。なぜなら、人間は、現実「語る」ことにおいて、言語と人間のこの本質的位階に関する構造を、容易に誤認するからである。「語る」ことは、その「語られる対象」を「名前を有する」あらゆるものに拡大することができる、すなわち、言葉

を所有し、意のままに処しうると思い込む(dóxa)。この思い込みは、節度を失って遂には「語る」ことを可能にする力さえ我がものにしていくという所にまで膨張する。こうして人間の「語ること」と「語られる対象」との知(ドクサとしての)における混合と誤認が起こる。実は、「言語に対する反省的な構えと知」は「言語の本質」に対するこのような一種の「誤認」から始まる、と言ってもよい。エルンスト・カッシーラーは、彼の著書『象徴形式の哲学』⁴⁾の中で、西洋における自覚的な言語論の始まりをヘラクレイトスの「ロゴス」思想に置いている。我々もカッシーラーに倣って、ヘラクレイトスから論を始めよう。というのは、ヘラクレイトスの思想は、「ミュトスはロゴスと同じものである」という正統な認識を、言語に対する根源的な「誤認」から護ろうとする試みから生まれたものだからである。

通常「神話(Mythologie)」と解されるミュトスはそれ自身「言葉」そのものを、それも、人間の知解から脱去した神性が呼び掛けてくる要求として生起する「言葉」そのものを意味する。それには、人間存在の隠れた根源に関わる「秘密」の力がこめられている。したがってミュトスとしての言葉の本来の本質は、人間の耳目に到達するその個別的形質にあるのではなく、世界全体を統一的に支配しつつ、人間存在の根拠に向けて秘かに働きかけて、その根拠をその支配のなかに繋いでいる「秘密」の側にある。人間が言葉においてこの「秘密」に注意を向け、それが尊重されるかぎりにおいて、すなわち「秘密」が護られるかぎりにおいて、言葉は賛美されるべきミュトスであり続ける。〔カッシーラーは「リグ・ヴェーダ」を一例に挙げている⁵⁾。仏教の「法(dharma)」もこうした意味でのミュトスと同一の本質を有するものと言えるが、同時に以下に述べるヘラクレイトスのロゴスの意義により近いと考えられる。〕日常的談話におけるすべての言葉は、このミュトスの母胎から産まれた。この意味で「言葉」の始原は、本質的に「秘密」である。しかし、その本質が「謎」であるかぎり、その談話はいまだ人間の自由意志の下には入っていない。人間が「言葉」を自由に操る能力を獲得するためには、ミュトスからその遺産を継ぎながら、同時にミュトスの拘束から免れる必要がある。この両方を同時にやってのけるたった一つの方法は、ミュトスの言葉を聞きながら、その「秘密」の側を閑却に付するということである。「秘密」を忘れることによってその重荷を免れ、はじめて人間は自らの力に適う言葉を手に入れることができる。こうして人間は自明で理解可能な言葉の領域の中で、「秘密」による連携とは異なった、意図的な伝達手段を用いた人間関係を形成して行くことになる。ここにおいてミュトスとロゴスは分離し、やがてはソフィストたちが行なったように対立させられるようになる。

II

ヘラクレイトスのロゴス思想は、言葉のこうしたミュトス的本質(秘密)を日常的談話における言葉の理解と使用から護ること、言葉の本来の高貴さ(この高貴さの根源はそ

の「秘密」にある)を取り戻すことである。このことは、日常的談話へと拡散しているミュトスを「秘密」として集約する (légein) その集約的本質 (lógos) を会得し (noéin), それに注意を向けることを意味する。言葉の多義性を利用したヘラクレイトスの文体の「晦渋さ」は、日常的談話の中に隠されたロゴス (隠れた調和 palíntropos hârmônîe : 一にして全 Hen Pánta) へと注意を向けさせるための手段に他ならない。このヘラクレイトスのロゴス思想が開いた言語論 (エピステーメー・ロギケー) の地平は、プラトンのイデア思想へと変奏されながら、西洋的な知の構造を決定的に規定している。西洋のすべての言語論にとっての故郷はここである。したがって、やや長文にわたるが本論文の今後の展開にとって重要な意義を担うものとして、ディールス編のヘラクレイトス断片1の全体を引いておく。

「だがロゴスはいつまでも常にロゴスでありつづけるのだが、人間どもは、それを聞いてしまう前にも、それを初めて聞いてしまった後にも、把握しない者 axynetoi として振る舞っている。すべてのものは、じつは、katà tòn lógon tónde すなわちこのロゴスに適合しロゴスに従って存在者になるのである。にもかかわらず彼ら (人間ども) は、私がそれぞれのものを katà physin 存在〔自然・本性〕に 応じて分析し、それがどんな状態にあるかを明らかにする際に述べる語句 [épea] や作品を聞いたり読んだりして自分で試みてはいるのだが、しかも、彼らは経験しながら、何かを敢えてするというをしたことがない者に似ている。他の人間ども (他の人間ども、だれもかれもみんな hoi polloi) に対しては、彼らが眠っているときにしたことは、その後再び彼らに対して隠蔽せられてしまうのと同じように、ほんとうに目覚めたときにしたことも、やはり隠蔽されているのである。」(ハイデガー『形而上学入門』の彼のドイツ語訳より)〔下線筆者〕

ヘラクレイトスが問題としているのは、ロゴスとエペア (単数は épos) の区別と対立である。言葉において人間の耳や口がその機関として有効な側面がエポスであり、「そのように聞こえ、そのように話す」ことのできるエポスによって成り立つ知見がドクサ (dóxa) ある。こうしたドクサは、知を「見ること (ideîn)」に代表させるギリシア人によって、「(勝手に) 見做すこと」(私見) と「単に (あたかもそのように) 見えること」(仮象) として把握された。ドクサは、「カタ・ピュシン (存在に依じて)」物事に対応していない。「カタ・ピュシン」に物事に対応するには、エポスを聞くのではなく、エポスによって隠蔽された、エポスにとっては「秘密」であるところのロゴスを聞かなければならない。ヘラクレイトスは「語句に拘泥せず、ロゴスを会得すべきである」と言うのである。しかし、人間にとって日常的に身近な存在といえ、いつでも身の回りにあり、手っ取りばやく、しかも自由に処理できるエポスの方であり、それこそ自分の私見 (ドクサ) に苦もなく応じてくれる便利な道具である。こうしてエポスに拘泥することが、逆に私見に固執させることにもなる。ここに、エポスとロゴスの区別と対立と共に、私見の領域の人間とロゴスを追究する人間という二つの人間形態の区別と対立が顕在化する。ここでは、その区別と対立につ

いての哲学的議論の検討は置くとして、ひとまずこうした事情が, *sophistês* 及び *philôsophos* を誕生させ、言語論を含めた西洋的知がそこから展開してゆくところの出発点になることを証示することで間に合わせよう。

III

プラトンの対話編『クラテュロス』は、私見の領域の人間（ソフィスト）とロゴスへの憧憬（エロス）に取り憑かれた人間（フィロソフォス）の、言葉に対する理解の相違を鮮やかに浮かび上がらせている。そこでは、言葉を基本的にもっぱら社会的功利性の視点から捉えようとするソフィストと、ロゴスの次元に通じる契機を尊重しようとするソクラテスの対話が展開される。カッシーラーは、この対話に関して、ソフィストたちが「語の多義性を平然ともてあそぶことによって、事物さえもが彼らの手中に引き渡され、その規定性を精神の自由な運動に解消してしまうことが許されることになる。言語についてのこうした最初の意識的反省と、精神が言語に対して獲得する最初の意識的支配が、同時に論争術（エリステイク）の支配ともなる」としながらも、「他方、ここから、つまり語るという内実と究極的根拠についての反省から反作用も生じてきて、それが概念についての新たな基礎づけと新たな方法論とに結実してゆくことにもなる」⁶⁾と、積極的な評価を下してもいる。しかし時代を下ってのこの評価も、一方にソクラテスの反エポスの精神が存在していればこそないうるものである。西洋の言語論は、以後この両陣営の主張の相互作用として展開すると言ってよかろう。この相互作用の領域の中で初めて、「論理学」が要請され、「言語」が「記号」として把握されることが可能となり、また把握されることが必要となる。

この対話編には「名前（オノマ）の正しさ（*horthôtês tôn onomátôn*）について」という副題が付されている。オノマ（名前）は言葉に関して、ヘラクレイトスの言うエポスにもロゴスにも言わば等距離にある呼び名である。ここでの議論は、オノマが事物のピュシスを表しているのか、すなわち「カタ・ピュセイン」に生まれたものか、それともノモス（*nómos*：習慣・約束事・社会規則とか訳される）に基づいているのか、というものである。因みにこの場合のノモスはエポスの次元で理解されている。それに対してソクラテスはノモスにそれ以上の意義を与え、ポリスの内的規範としてロゴスへの魂における隠れた連携を認めている。この点で、以下のプラトンによるオノマにおけるエイドス（イデア）の位置づけは、ソクラテスの問いの姿勢に対して微妙なずれが認められる。ソクラテスは、オノマがノモスから生まれるとするヘルモゲネスの主張に反対して、クラテュロスの自然発生説に同意しながら、オノマはすべて正しく事物を名づけているとする彼の主張には異を唱える。ソクラテスがオノマの正当性に対して付ける条件は次のものである。「オノマは各々の事物に本性上（カタ・ピュセイン）具わっている」が、「各々の事物に本性上具わっているオノマに注目しながら、そのエイドス（形相）を文字や音節のうちに具体化できる人だけがオノマの製作者（デミウルゴス）である」（『クラテュロス』390D）。この対話編はプラトン中

期のものとされている。この時期は、プラトンがソクラテスの直接的な影響から次第に脱皮して独自の思想を形成しつつある時期である。プラトンは、オノマの正当性の根拠をその「本性上」の由来に置くだけでなく、オノマに帰属するエイドス（イデア *idéa*）を具体化する（別な言い方をすれば、可感的なものを通してイデアを会得する）ことに置くのである。こうした意味でのイデア思想は、もともとソクラテスのオノマに関係する「問い」（何であるか *tí éstin*）から生まれた帰結である。

「イデア」という名称と本質が、ソクラテス的「問い」の単なる帰結と解されるべきか、それともその答えと解されるべきか、これはこれで西洋の思考の歴史の全体を揺さ振る大きな課題であったし、現代でも課題であり続けている。そのいずれにせよ、イデア思想はその内的必然性において、ソクラテスの問いに始まり、西洋の爾後の思考と知の次元（哲学）を開いて、「論理学」に至って完結する。その完結の作業は今やっと始まったばかりである。

IV

オノマにまつわるソクラテスの問い、「ティ・エスティン」と問うことが、エポスに立脚して言語の多義性と恣意性という契機を捉え知の相対性を主張するソフィスト的思考に対抗して、オノマからロゴスへと突き進もうとするソクラテスの唯一の方途であった。一般に「何であるか」という問いが問い求めるものには二種類ある。まず認識が不明確な「あの（この）事物は何であるか？」（問い①）と問える。この問いは、あの（この）事物がそのように呼ばれる名前（オノマ）が与えられることによって、答えられる。すなわち、その事物にふさわしいオノマが問い求められている。もし与えられたオノマが或る約束事・習慣（ノモス）に基づいて生まれたものに過ぎず、そうしたオノマによる認識がノモスにおける効用によって計られ結局は相対的なものに過ぎず、本質的にそれ以上の真理（知の可能性）をその事物とオノマが要求しないと判断されれば、「何であるか」という問いはそこで終息する。このオノマはエポス（日常的談話）の交流の波の中に溶け込んで、自明な姿で使用に供され、特別に問題にされることはない。だが、オノマがノモスに由来するとしても、そのノモスそのものが問題になる場合には、「何であるか」の問いは、そこで終息することは許されない。エポス的ノモス（*pólis* の非一本質）ではなくロゴス的ノモス（*pólis* の本質）に生きるソクラテスにとって、オノマのピュシス（本性）は、ロゴスをピュシス（本性）とするところのノモスである。したがって事物の認識の真の根拠は、「カタ・ピュセイン」にロゴスに根付いている。ソクラテスは、ノモスの真の根拠たるロゴスに「魂（*psychê*）の気遣い」を寄せて、そのロゴスに由来する「カタ・ピュセイン」な「（魂における）潜在的要求として、オノマに含意されている規定性と一義性（ロゴスの本質）とを捉えた」⁷⁾のである。そして、この潜在的要求からソクラテスはオノマを超えて「何であるか」と問い進める、否、問わざるをえない。その問いは「そのような事物にオノマを付与するものは

何であるか？」(問い②)である。この問いは「何」を問い求めているのか。すでにこの問いは明確なオノマによる事物の認識を前提にしている。

現実にはこうした①と②の問いの中間に位置づけられるものとして、「何がそのようなオノマを有するものであるのか？」(問い①')という問いが可能である。この問い①'は、問い①とは逆に、そのオノマに適合する事物を問い求めている。したがって問いの①も①'も、事物とオノマの結合を問題にしているという点において、基本的には同次元の問いであると言える。

問い②のこの「何 *ti*」は何を指しているのか。問い①の「何」はオノマを指している。問い①'の「何」は事物(事例)である。それに対して問い②の「何」は、ロゴスからの「潜在的な要求」に対する応答である。そこで「潜在的な要求」として問われているものは、オノマと事物の結合(通常の意味での知)の根拠(前提・条件・限界)である。それは一切の通常の知(ドクサ)に先立って、その知を根拠づけるために本来「予め知られていなければならないもの(*tā mathēmata*=数学的なもの)」を問い求めている。この「知の条件についての知」が本来のエピステーメである。ドクサは本質的に常にエピステーメへの途上にある(べきである=「潜在的な要求」)。したがって、この問いはオノマと事物、事物とピュシス(本性)の自明的な結びつき(ドクサ)を動揺させ亀裂を生じさせる。その動揺の震源地は「秘密」として支配しているロゴスである。この問い②は、亀裂を介して深淵のロゴスに通じている。ソクラテスは問い②を問い続けながら、その問いに対して、「死に至るまで」敢えて答えを提示することはなかった。それは彼の無能や不決断の故ではない。問い②の「何」こそ、彼の魂に語りかける「秘密」としてのロゴスの合図に他ならなかったからである。

プラトンがソクラテスから受け継いだものは、この問い②の「何」である。彼はこの無名の「何」に「アイデア」という規定を与えてその存在性と機能性を明確にし、それによって師の遺志を成就させるものと心得ていた。しかし、このアイデア思想は、ソクラテスが魂においてパステイン(感受)したロゴスに通じる亀裂とは異なった、もう一つの亀裂(場所;*chōra*)を切り開くことになるのである。西洋におけるエピステーメ・ロギケー(ロゴスを真の意味において知ること)への努力すなわち哲学が具体的・歴史的に展開するのは、プラトンが開いたこのもう一つの場所においてである。このことが、哲学(エピステーメ・ロギケー)が「形而上学(*Metaphysik*)」になり、その形而上学が「数学的思考」を身上としながら、その形而上学から生まれた「科学」が「論理学」や「数学」という形態をとることによって、生みの親の形而上学に反逆するという皮肉な運命をもたらすのである。というのは、形而上学はロゴスを追究しながら、いかなる場合いかなる形態においても、かのロゴスに直接向かうことをしないでその周辺を遊動し、ロゴスの現成する場を常に空白にしており、そのために、形而上学の論理の全体が唯一のロゴスによって収斂されることなく、ロゴスをめぐってその内部で相互にレーゾン・レートルを賭けて対立しあ

い、言わば生存競争を行なっている状態だからである。

V

プラトンが開いた場所 (chôra→chôrismós) はどんな場所か。先に見たように、プラトンは「オノマの正当性」の根拠を、「各々の事物に本性上具わったオノマに注目しつつ、そのエイドスを文字や音節のうちに具体化できる」こととした。そしてそれができる人だけが「オノマの製作者である」とも言う。ここで「オノマを製作する」とは、オノマを介して事物の本性(真理：存在)を文字や音節が機能する感覚の領域で判知すること (gnôsis) を意味する。そこでオノマにおいて判知されるべきものは本来、その都度の「各々の事物」でもないし、「文字や音節」でもない。判知されるべきはエイドス(アイデア)である。エイドス(アイデア)が「何であるか」を導き、一切の事物の存在と知を条件づける。

ここで、オノマに関わる諸契機をアイデアを中心にして関係づけることによって、一つの独特の構造を描きだすことができる。すなわち、オノマ全体のピュシスをアイデア—文字(音声)—事物—人間的知の三角錐の構造として見ることができる。この構造には更に、プラトンにおいては、別な秩序的な関係構造が付け加わる。それが「分有(méthexis)」・「亀裂(chôrismós)」・「超越(metá)」である。この秩序構造において人間的知は、三角錐の頂点のアイデアとの連携の上で、三角錐の底平面の文字(音節)と事物に対して二重の関係(アイステーシスとノエーシス)を持つことになる。人間的知がオノマ全体のピュシスをくまなく判知するためには、この二重の関係を可能にする領域全体を歩みぬかなければ(ディアノイア)ならない(『第七書簡』における判知の四段階説)。このディアノイアは、先ずオノマを感覚の領域において各素材へと分節し、その拡散した諸契機を今度はアイデアの形相的統一性へと収斂させることを意味する。名前(オノマ)→定義(ロゴス)→映像(エイドーロン)→真知(エピステーメー)；「これらを経ることによって必然的に真知に達する」。このプラトンの後期の特徴的な方法は「分割法：diafresis」と呼ばれ、アリストテレスが「力の弱い三段論法」と批判したものである⁸⁾。しかしこの分節と統一の作業は、単に素材を形相へと整理するといったものではない。それは存在と真理に関わる。アイデアを欠く事物は非存在(mêón)であり、アイデアのみが真の存在(ontôs ón)である。

プラトンの思考は、直接アイデアに達すること(それは神的な知には可能であろうが)よりも、人間的知が段階的に経過する領域を明らかにすることに重点を置いている。その領域がメー・オンとオントース・オンの間、すなわちオンの領域である。オンはギリシア的には、「存在すること」と「存在するもの」という二重の意義を有している⁹⁾。プラトンはこの二重の意義の一方「存在すること」をアイデアに、他方「存在するもの」を事物と文字(音声)、すなわち感覚的なもの(アイステートン)に振り当てる。彼はこのアイデアと感覚物との存在論的關係をメテクシス(分有)と呼ぶが、このメテクシスは、後にローマの文法家によって「分詞(Participium)」という名称で言語論の中に位置づけられる。だが、

メテクシスの領域には単に静的な関係だけが支配しているのではない。この領域は人間の知が、「存在するもの（そのつどの事物・感覚物）」から「存在すること（イデア）」へと超え出て行く領域である。「何であるか」と問うことは、プラトンにとって、イデアと感覚物の亀裂（コーリスモス）の中で、地上の感覚物から天上のイデアへと仰視しつつ超越することである（パイデア）。この超越において初めて「存在するもの」はそのものとして「存在する」。オノマから出発して真知に向かう運動は、このコーリスモスの領域において演じられる。かくして、西洋におけるエピステーメ・ロギケーの舞台は整った。この舞台は、「ただ単にそこに存在するもの（ピュシス）」を超越（メタ）することにおいて、そのものとして存在させる（認識する）ことになるコーリスモス、すなわち「メタ・ピュシス（形而上学）」という場所（コーラ）である。そこは基本的に「オノマの内部の引き裂かれた空隙（単なる空隙ではなく、位階を有する空隙）」である。カッシーラーは「プラトンのもとではじめて Repräsentation（代理・表出・表現）という概念が中心的な体系的意義を獲得することになる」と述べているが、この概念が有効でありうる（したがって「文字（音声）」が「事物」の「存在（意味→イデア）」を「代理的に表示」する「記号」として機能するのは、オノマの構造的求心力が働くこの「空隙」の中においてのみである。

VI

プラトンの「オノマ論」を、形而上学における超越論的・メタ構造論と言語論の視点からもう一步踏み込んで見てみよう¹⁰⁾。そこで問題の中心になるのは、先に挙げた「オノマ」から出発して「真知」に至る四段階のうち「定義（ロゴス）」の段階である。このロゴス理解は、のちにアリストテレスが「言表命題」という意味でのロゴスとして、さらに明確な形而上学的な説明を与えることになる。そこでは、ロゴスは「説明方式」一般の意味で用いられ、厳密な意味での「定義」は *hōros*；限定と呼ばれている¹¹⁾。プラトンの場合には、この「定義」は「説明」としてのロゴスであるが、その「説明」はあくまでもメー・オン（非一存在）からオン（真の存在・イデア）への途上に立つもの（*genesis*；生成）として位置づけられる。この「説明」は、メー・オンとしての「各々の事物」に関して「文字（*grammata*）」ないしは「音節（*phônê*）」を使用して行なわれる。その際、「事物」に関して様々な言明（ロゴイ）がなされるが、この言明は、もしそれが有意味な、すなわち生成に関わるものであるならば、なんらかの形でイデアに関する何かを「随伴」しているはずである。そしてこの「随伴」は、「名詞（限定された意味でのオノマ）」と「動詞（*rhêma*）」において、オン（存続的存在・イデア）の直立した状態からの「傾き・ずれ」として表明される。この「傾き・ずれ」はギリシア語で *enklisis* と言われる。このエンクリシスは後に動詞の変化（活用）の名称となり、動詞も含めて基礎語形の変化（偏向・活用）のすべてを意味していたプトーシス（*ptôsis*）は、名詞の変化（格）を名づけるものとなった。プラトンにおける定義的説明（ロゴス）は、文字・音節を使用して事物に「随伴する」イデアからの「傾き・

ずれ」(人称・数・時間・態・法)を表示することである。こうした形態の言明は、それが目指している対象を直接的に表示することはしないで、ただそこからの「傾き・ずれ」を明示することによって対象を間接的に指示する(記号的性格)にすぎない。しかし、それは「ミュトス」或いはヘラクレイトスにおける「ロゴス」、さらにはソクラテスにおける「ダイモーン」がそうであったように、端的な「暗示」=「シビラ(巫女)としての言葉」なのではない。ここには或る明確な知の枠組みと目標と前提条件が設定されている。その枠組みはオノマであり、目標にして且つ前提条件がアイデアとしてのオンである。

こうした「傾き・ずれ」が表示される「場所(コーラ)」,すなわちメー・オンからオンへのゲネシスが生起する「場所」がコーリスモスである。コーリスモスが「空隙」の意味をもつのは、そこがアイデアからの「傾き・ずれ」をこそ表示すべきであって、決してその場所そのものの相貌を呈示してはならない性質のものだからである。このことは逆にコーラが、現在そのような意味に解されているところの「延長としての空間の意味での場所」ではないことを、示している。すなわち、「コーラとしての場所(トポス τόπος)」は、本来そこに立っているものによって占められ、塞がれるべき性質を有している。コーラの空隙は、本来的にそこを占めるべき・占めるはず・占めうる(müssen, sollen, können)ものに帰属している。言い換えれば、コーラはこの müssen, sollen, können によって隈なく支配されている空隙なのである。したがって、それは先行的に一つの「要求」によって統制された「窮迫(Not)」の領域である。その要求は直立する(べき)オン=アイデアから発している。その要求に呼応するかぎりにおいて、人間(魂・ノエイン)は「メテクシス;分有」を理解する。メテクシスの理解(ノエイン)とは、この「窮迫」を、目の前の事物を超えて不可触の高处に、一切に先立って支配するアイデアから発する不可避の絶対的な要求として理解することである。こうした「不可触・不可避の窮迫の絶対的な先行性」が「超越性」の本質である。「超越性」は、したがって必然的に「窮迫」の内にある、すなわち内在的である。

VII

こうした事態を「知」の様式で表わすと、次のようになる。「或るもの」は、そのアイデアが「既に予め知られている」ことによって、その「或るもの」として初めて知られるようになる。したがって、本来アイデアは一切の知の前提条件であって、最も早く知られているべきものである。しかし現実の判知においては、アイデアは最も遅く知られる目標である。すなわち、現実の知は、その前提条件を曖昧で無規定に有している(have)状態(ドクサ)から出発して、そのつどの知を超越しながら「既に予め知られている」ものを規定的に獲得して(take)ゆかなければならない(エピステーメー)。この have から take への移行が内在的超越である。なぜなら、have の中には既に take すべき契機が内在しているからである。これが「数学的知(プラトンでは「幾何学」)」の本質構造である。それはそのつ

どの現実のものを知るのではなく、また目の前の現実から学び知るのでもなく、「予め知られているべきもの(イデア)」を根源に遡って知ること(プラトンでは「想起(anamnêsis)」)である。

プラトンの場合は、それは「オノマ内在的超越」であって、オノマに関わるノエイン(知の前提条件に対する知)は、定義的説明を介してこの「窮迫」が支配する全域を通過せねばならない(ディアノイア)ように予め強いられている。この超越の圏内においては否応なく、「事物は事物として何であるか」と問わなければならない。なぜなら、オノマはそれ自身において、知(ディアノイア)の前提と目標、空隙と充足、始まりと終わりとを同時に内包しているからである。「事物としての事物(ontôs ón)」を究明する西洋形而上学の圏域は「イデア論」としてのこの「オノマ内在的超越」であり、現代の「超越論的言語論」や「メタ言語論」の流れはここに淵源する。だがこの点において、ソクラテス的「何であるか」を強制し導いていたロゴス、すなわちオノマの外部から支配している「秘密(語られざるもの・知られざるもの)」としてのロゴスは、イデアがそれを偽装することによって一層深く隠蔽され、それどころかイデアのオノマとしての「限界」が忘却されることによって、隠蔽の領域が決定的に固定されることになる。西洋のエピステーメー・ロギケーは、以後この固定された圏域を離れることはなくなった。

形而上学という場所が「オノマ(名前・言葉)」の内在的超越構造から出来たという事実は、西洋の知の歴史に宿命的な枠組みを与えることになる。「イデア」が理念、範型、典型、原型、理想、範疇、観念と様々に言い換えられ、ついには最もありふれたもの、一般的なものとして「概念」という形態と機能を帰せられるにせよ、そして、ロゴスが「語ること」という意味に偏って理解されてラテン語の ratio へと翻訳され、根拠・理性(ラチオとしての)へと変貌するにせよ、西洋における一切の学的(アカデミックな)知の営為と表現は、ことごとく「言語」(ミュトス、ロゴス、エポス、オノマ、ホロスのいずれであっても)の凌駕不可能な支配に服していると言える。「知と言語」の顕著な結びつきは、次のアリストテレスの「カテゴリー」論において決定的な段階を迎える。この段階において、プラトンのイデア思想の中になお余韻を残していた「言語の神秘性」が、完全にと言っていいほど拭い去られる。アリストテレスの言語論は、西洋のエピステーメー・ロギケーが「事象論理学(Sachlogik)」から「形式論理学(Formallogik)」への途を辿ることになる、後戻りできない第一歩となる。(以下次号)

註

- 1) E・ハインテル他『言語哲学の根本問題』磯江他訳、晃洋書房、「言語哲学入門」第七章(言語哲学、言語科学ならびに言語心理学)104頁以下参照。
- 2) M. Heidegger: Was heißt Denken?, Tübingen, 1961, 2Auf, S. 123f.
- 3) 一般に神秘論者のヤーコブ・ペーメの言葉とされている。
- 4) Ernst Cassirer: Die Philosophie der Symbolischen Formen, Bd. I. Die Sprache, 1923. 『シンボ

- ル形式の哲学』（第一巻言語）生松他訳，岩波文庫，第一章「哲学的観念論の歴史における言語問題」102－8頁。
- 5) 同，101頁。
- 6) 同，108－9頁。
- 7) 同，109頁。
- 8) アリストテレス『分析論・前書』A31，46 a 31－39。
- 9) M. Heidegger, Was heißt Denken? s. 134.
- 10) M. Heidegger : Einführung in die Metaphysik, Tübingen, 1953, s. 43f.
- 11) アリストテレス『形而上学』1030 a 1－30.

参考文献

- 1) John Lyons : Langage and Linguistics-An Introdution-, 1981. 『言語と言語学』近藤達夫訳，岩波書店。
- 2) Ferdinand de Saussure : Cours de linguistique générale, 1916. 『言語学原論』（1931年発行第3版）小林英夫訳，岩波書店。
- 3) 『世界の名著』（ラッセル，ヴィトゲンシュタイン，ホワイトヘッド）石本新他訳，中央公論社。
- 4) Edward Sapir : Language, An Introduction to the Study of Speech, 1921. 『言語』泉井訳，紀伊国屋書店。
- 5) Noam Chomsky : Current Issus in Linguistic Theory, 1964. 『現代言語学の基礎』（M・ハレ「音韻論の基礎」・「生成文法の音韻論」を含む）橋本他訳，大修館。
- 6) Michel Foucault : Les mots et les choses, 1966. 『言葉と物—人文科学の考古学—』渡辺他訳，新潮社。
- 7) 新岩波講座・哲学3『記号・論理・メタファー』中村雄二郎他著，岩波書店，1986年。
- 8) 講座記号論『記号を哲学する』川本茂雄編，勁草書房，1982年。
- 9) Stephan Ullmann : The Plinciples of Semantics, 1959. 『意味論』山口秀夫訳，紀伊国屋書店。
- 10) Jacques Drrida : De la Grammtologie, 1967. 『根源の彼方に—グラマトロジーについて—上』足立和浩訳，現代思潮社。

Die Sprache und das Zeichen (Nr. I)

— Die Genealogie der Sprachwissenschaft —

Satoshi NAKASHIMA and Teruo KURISU*

*Fakultät der Technik von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,***Aushilfsdozent von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,**1-1 Ridai-cho, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1994)

In der modernen Technologie, ist das Zeichen von besonderer Bedeutung, die mehr als die bloß methodische Nützlichkeit ist. Diese Sachlage folgt aus dem Werden der griechischen Logik; epistêmê logikê. Hier suchen wir den Ort des Werdens, wo sich die Wissenschaft von der Sprache und dem Wissen in Europe entfaltet. Der Ort ist derjenige tópos (chôra), den der Platns Gedanke von idéa und onoma erschlossen hat. In diesen Ort gedeiht die europäische Metaphysik.